

【一薬の魅力⑩ [講義ダイジェスト] <3> [医薬品開発論] 過去問を盛り込んだ内容】

2025/7/24 公開



第一薬科大学で行われている講義を紹介する[講義ダイジェスト]。今回は薬学部6年を対象にした[医薬品開発論]です。別の日にそれぞれ2人の先生が説明。6年は来年、薬剤師国家試験が控えていることもあって、いずれも過去問題を盛り込んだ内容になっていました。

俵口奈穂美教授は医薬品の生産額について、2015年までは6兆円台でしたが、医薬品の金額が変わり、2020年には9兆円台になったことを指摘。なかでも2015年までは心臓や血管などの循環器系に関連する病気や症状を治療するために用いられる「循環器官用薬」の割合が高く、その後は「その他の代謝性医薬品」が高くなったそうです。

国民医療費の説明では、診療費など「含まれるもの」と、評価医療（先進医療）など「含まれないもの」についても解説。医療保険と介護保険の違いについても触れ、「よく引っ掛かりやすい」とアドバイス。国民医療費における75歳以上の後期高齢者医療費の割合は、もっとも多いわけではないことにも触れました。

薬物療法の経済評価手法の説明もあり、このうち「薬用効用分析」について「絶対に忘れてはいけないので覚えておいてください」と俵口教授。「生活の質」と「生存年数」をひとつの指標で表現した「QALY」（健康で過ごす：1 死亡：0 半身不随：0.5）を使って薬物の費用対効果を分析するのだそうです。

首藤英樹教授は、一般社団法人「くすりの適正使用協議会」提供の資料を活用して「バイオ医薬品」の講義を行いました。

バイオ医薬品とは、遺伝子組換えや細胞培養の各技術を用いて製造されたタンパク質を有効成分とする医薬品で、従来の化学合成医薬品では十分に解決できなかった疾患への効果が期待されています。消化器内のタンパク質分解酵素によって消化されるため、経口投与ではなく、注射による投与が一般的です。



また医療現場では、投与後に起こり得る反応（インフュージョンリアクション）や、免疫チェックポイント阻害薬による「免疫関連有害事象」（irAE）などに注意し、適切な薬学的管理を行うことの重要性も説明しました。